

はじめまして グループ情報

地域社会の輪の中で老人介護を目指す

〈サークル・となりのわ〉

老後をどう生きたらいいのか―これは高齢者だけの問題でなく、誰もがいつかはたどる道である。高齢化社会と女性の問題を深く考えたいと、市の婦人セミナーに参加した三十五十代の主婦十六人が二年前に会を結成。

老人問題を考える婦人セミナーへの参加、寝たきり老人宅の介護手伝い、病院介護実習リハビリ教室参加等、学習と実践両面からの活動は、各方面から注目されている。

「となりのわ」の「わ」は和であり輪である。家族・地域・会員の和、互いに働きかけあう人々との輪（つながり）を大切にし、輪を更に大きく社会に広げたいと意欲的である。

学習と老人介護活動を進める中から、地域を一つの家族と考え、そのあり方を探っていききたいと積極的な活動を続けている。

連絡先 磐田市西町三〇七

電話 〇五三八三(2)七四九六

代表者 堀内 由紀代



声のかけ橋として十三年

〈虹の会〉

目の不自由な人たちと読書の楽しさを分かち合いたいと本の朗読・録音奉仕に取り組んでいる。これまで録音したのは九十分テープで約千四百巻。純文学、推理小説、俳句や短歌、児童文学など、数多くの作品をカセットテープに吹き込んだ。

現在会員は二十代から七十代の主婦二十六人。月一回、NHKのアナウンサーからイントネーションや間のとり方など朗読指導を受け、確かな読みをめざしながら、録音は各家庭で、家事の合間に行っている。根気のいる作業だけに、忙しい日常での録音活動は、長続きさせるのが大変と会員は口を揃える。

昨年は朝日ボランティア奨励賞を受け、これまでの活動が高く評価された。今年は漱石の全作品を吹き込もうと意欲を燃やしている。

連絡先 静岡市西草深町一五一九

電話 〇五四二(5)四九一三

代表者 伊藤 真子



ふるさとの伝承集を

〈三島北上婦人学級「くらしのサロン」〉

消費生活講座やリーダー養成講座を終了した三十代から五十代の主婦二十人で、地域の婦人学級を発足したのが五十九年度。

新幹線開通から急速に宅地化し、沼津や東京方面からの転居者が地元在住者より多く、大半が核家族という状況である。

講演を聞いたたり生活体験の中から問題点を話し合っているうちに、まず今住んでいる土地柄を理解し、地域との連携を深めようということになった。郷土史やことわざ、しきたり、方言、民話等を家庭や老人会へ出向いて取材し「北上郷の伝承集」をまとめ上げた。

地元や周辺からの反響も大きく、夏休みには少年ふるさと教室で、子供たちに「伝承集」の解説もしてきた。さらに新企画として地域の主婦の生活の知恵を集めたりしている。

連絡先 三島市徳倉四一七一一〇

電話 〇五五九(8)六二〇八

代表者 庄 司 峯 子



ああよかった

ヨチヨチ歩きの子の長男に氣をとられて、三才の長女が車道を渡りかけているのを、この目で見ていながら引き戻すことをしなかった。車があわててブレーキを踏み、クラクションを鳴らす。初めて我に返ったように長女の手を引いた私。今にも怒鳴りださんばかりの運転手の顔。バツが悪くなってごめんなさいと頭を下げた私に、にらみ返すような運転手の目。

あの目を思い出すたびに運転者の責任と歩行者の自覚を改めて思う。車に乗っていると、歩行者の図々しさにあきれることが多いのに、自分が歩行者になるとこの始末。まして幼児連れではますます心くばりしないといけないのにと大いに反省。しかし、しかし、大事故にならずに本当によかった！

静岡市 飯野篤子

デイータイム



母のこと

春になると、近所の庭の白い木蓮の花がいつせいに開きます。

夕闇の迫るマンションのベランダから、暗がりの中に浮かび上がるその白い花を眺めていたら、ふと郷里にいる母のことに想いがとびました。

白い木蓮のように、若い頃の写真の母は髪をいつもきゅつと後にひつつめるようにした白い顔に、くつきりとした目鼻立ちの人でした。物心がついてからの私はそんな母の着物姿がとても自慢で、そして好きでした。

その母が車椅子の生活になってから、もう十年が過ぎました。

三期目の終わりに入っていたという癌をやっと克服し、京都の病院から退院してまだ間もない頃のことでした。二階から階段を降りる時に、ほんの数段踏み外したというだけの瞬間の不幸な出来事が、その後の母を車椅子に縛り付けてしまったのです。

車椅子の生活を余儀なくされてからの母はその強い精神力で、病氣もまた、まるまる慈しんで、前向きに受入れているかのようにみえます。

そして、そんな母の姿を見て育った私の二人の息子達は、弱いものへの思いやりとやさしさの心を学びとってくれました。

春になると必ず開く木蓮の花を、母にはなるべく長く見てほしいと思います。

静岡市 増田 啓子

テレビ学習

我が家で待ちどおしい番組の一つに、NHKの「市民大学」がある。この種の番組は少しばかり固いテーマが設けられているから、ルンルン気分と言う訳にはいかないが、暮れの五夜を連続して視聴し深い感動を覚えたものに「人生の四季」がある。講師は聖路加看護大学学長、日野原重明氏であった。

主人と私は、ビデオりしつづ卓越した氏の老いについての語りかけにうなずきを何度したとか。人の一生を春夏秋冬にあてはめた氏のサブタイトルは、「生きる喜び」「仕事と幸福」「病む心とからだ」「老いに生きる」「自らつくる」で、医師の立場から宗教思想、職業、奉仕、家族関係にまで広げられ氏自身の老いに生きる心境がこんなにも素晴らしいものだったかと初めて知った。

息子達の教育期が終わり、これからは人生の冬に備えて、心豊かで健やかな日々を自分達でつくっていかねばと思う。夫婦共々、放送利用で学ぶ喜びが出来てとても嬉しい。書店に行つては、テキストのコーナーを必ず見ることになっている。魅力的なテーマに出合えば、主人と話し合ってみるようになっている。老いて別々の考え方や趣味では寂しいだろうと思うからである。

三人の息子達は、仕事と趣味を両立させて見ていてもたのしい。彼らは今、人生の夏を力強く歩いている。現役時代に何らかの形で打ちこめる物を育て始められる人は幸せだろう。

沼津市

近藤由紀子



海外スポット

中国の女性

中国の女性の地位向上はめざましく、教育、政治、経済、文化等における社会進出は大変活発になつてきており、中国の法律では、婦人に対して、五つの平等(政治、経済、文化、社会、家庭の活動分野)四つの保護(婚姻、家庭、母親、児童)三つの義務(育児、扶養、計画出産)二つの禁止(自由結婚の妨害、老人虐待)を保障している。このような中国について、昨年十月浙江省婦女連合会を中心に婦人の現状について調査をしました。

☆浙江省婦女連合会

婦人行政は、婦女連合会が中国共産党や人民政府の指導に基づき推進している。組織は三部一室一処からなり、四四人の専任職員により運営されている。同会は啓発誌「家庭教育」の発行や婦人の人材育成のために婦女幹部学校を設け、三八人の専任教官を配し、人材育成に努めている。また法律顧問処において、婦人、児童の権利保護や民衆の訴えを受理、審理し解決を図っている。訴えられた男性はほとんどが敗訴となっている。



家庭を訪問して

☆婦人の政策決定の場合への参加

一九七八年の第五期全国人民代表大会では、婦人委員は全委員の二一・三%でした。また、省、市、県の首長(副首長)にも婦人が登用されている。婦人の登用については、紹興市のように副市長の複数制で登用したり、ガイドラインを設けて計画的な登用を行っている。

☆働く婦人

中国の婦人の就労率は九三%を越えている。工場では三交替制をとっているところが多いし、夜勤もあり就業条件、賃金は男性と同一である。幹部職員への登用も男女差別はなく、幹部の条件を、一、

若さ、二、専門性、三、革命思想、四、知識等に勝れており大衆から信頼されている者としている。中間管理職には多くの婦人が登用されている。

働く婦人の悩みは、仕事と家庭生活の両立である。中国では、解決の手だてとして、家事の分担、例えば、早く帰宅した者が夕食の準備をするとか、電化製品による省力化等工夫がなされている。育児については、働く母親のために託児所、幼稚園が多くあり、勤務形態により、勤務時間だけ預ける「日託」、月曜日から土曜日まで夜も預ける「全託」がある。全託の場合は子供と一緒に生活できるのは日曜日だけであり、面談した若夫婦は非常に日曜日が待ち遠しくさびしい日が続くとのことであった。その他、地域組織として、居民委員会が家事服務センターを設け、夕食の宅配等を行っており家事の外部化もみられた。

☆庭について

中国の家庭は民族的、伝統的に幾世代も同居する大家族が良いといわれるが、急速に核家族化が進み、一九八五年には六〇%が核家族になり、老人扶養、老人介護も社会問題になりつつある。

寧波市で庭を訪問した。庭は四方がレンガの壁で囲まれており、外敵が進入しにくいようにできている。この庭には三六世帯一二七人が生活しており、百年の歴史を持つてゐる。庭は自治組織である青少年教育委員会、宣教委、婦女委員会、衛生委員会、安全委員会において五好家庭(日常生活、仕事熱心、学習意欲、法律遵守、子供の教育の五つの条件に勝れている家庭)を目指した運営をしている。中国の婦人は学習意欲は旺盛で、この庭でも一児の母親が夜間大学に通学していた。

☆雑感

杭州市でのこと、朝、西湖畔に散歩に出た時、ホテルの食堂の若い女子服務員に声をかけられた。彼女は日本語の勉強中であり将来は通訳になりたいという。湖畔を歩きながら中国のこと、日本のことを話し合った。彼女の知識欲には感心した。

中国の人々は、中国は発展途上国であり日本や外国から多くのことを学びたいという。この熱意を肌で感じた研修であった。

こだま

ねっとわあく7号を

読んで



沼津市 一杉照子 (50代)

県発行の婦人のための情報誌があるのをこの号で知りました。家庭にいなから、いろいろな勉強ができてよかったと思いました。

就労、社会参加が叫ばれる反面、家庭から一步も出て行くことのできない人もあり、その方々にも読んで頂けたらと思います。

本の紹介では、各年代にそった本があり、「女の老い支度」や「書きたい女たちへ」は早速読んでみたいと思いました。

浜松市 伊藤 有 (40代)

小百合葉子さんの計報に接し、改めて「トップインタビュー」を読み返す。小学生の時に見た「そら豆の煮えるまで」の劇、高校生の時に直接聞いた張りのある声、優しいまなざし、多くが脳裏を過ぎる。

一筋の道を貫き通した人の一言一句は、すべてうなずくことばかり。豊かなゆとりある心を持って、日々を送りたいとつくづく思う。

静岡市 曾根佳子 (20代)

家庭の中にとっぷりつかって生活している私にとって、職場に進出し社会にかかわっていかうとする女性たちに大いに啓発されるものがありました。それぞれがおかれた立場にに応じて、どう社会との接点を見つけていくのか知りたいところです。

沼津市 大塚悦子 (40代)

今、女性があらゆる場でブクブクと泡のように力を発揮しているのが感じられます。

私も一昨年、専業主婦から社会参加し、人との関わりを通して物の見方や考え方を学んでいます。

本誌はカラー版でとても良いですが残念ながら紙面不足、後四ページ増やせたらと思いました。

徳島県 竹西暢子 (30代)

婦人のための情報誌を発行している都道府県は全国にどれほどあるのでしょうか。

男女平等がいわれる今日、あえて「婦人のため」と唱えているところに大きな意義があると思います。静岡県が「住みたい県」の上位にランクされる理由の一つが、このような県の方針からも伺えます。

本の紹介



「女の人生疊りのち晴れ」 重兼芳子著
専業主婦だった著者が五十歳を過ぎて芥川賞を受賞。社会と自分とのかかわりの中で自己を見失わずに生きる。人への愛しさや喜びが綴られている。

主婦と生活社 一、〇〇〇円 (K・S)



「女たちよ台所から世界を変えよう」 あき子の会編
これからの世の中、女性の視点で変えていかなくては。金もない人脈もない選挙戦に立ち上がった素人主婦達のユニークな闘いが展開されている。

ミネルヴァ書房 一、六〇〇円 (Y・M)



「団塊の女たち」 神 一行著
家族崩壊症候群ともいえる病理現象を最も多く抱える団塊世代の家族達。彼らが遭遇している憂うべき状況を多角的にとり上げ、家族のあり方を考える。

主婦と生活社 九八〇円 (T・S)



「したたか夫婦学」 牧野拓司著
老後をいかに暮らすかという生活設計は、どこの家庭にも欠かせない「非常袋」であるという。夫婦と人生をめぐる三十のエピソードが心楽しい。

サンケイ出版 九八〇円 (M・K)



「オトコ社会とつきあう法」 菅原真理子著
男社会で女はどのように生きたらよいかを具体的に多彩な例をあげているので読みやすい。就業中の婦人だけでなくこれから就職する学生にも勧めたい。

PHP研究所 九八〇円 (T・M)

あとがきにかえて

〈編集員座談会〉

村松 「国連婦人の十年」の最終年という記念すべき年に編集員になって、国際的な動きや、国内の法改正など関心を持ってたという点で実り多かったと思います。でも思うように表現できなくて書くことの難しさを強く感じています。

三井 グループ紹介で取材先を探すのに団体名簿をめぐり、こんなグループもあったのかと意外な発見でした。一語ずつ吟味する緊張の中で、編集の仕事はとても楽しく良い勉強でした。

杉山 婦人の生き方が多様化している今、意識面でもどの辺が本当の実態なのか、しっかり把握して編集できればと思いました。難しいですね。取材しながら本誌のページ数をもう少し増やせたらと思いました。インタビューした小百合葉子さんのご冥福を祈ります。

沢辺 私は以前からやってみたいと思っていた編集の仕事に関わることができ、また人間関係も広がり充実した一年でした。

河原 “ねっとわあく”を読んだことのない人が多く、せめて季刊発行ぐらいになるといいですね。

立場の違う人達との編集会議に参加し得るものが多くありました。婦人の十年の取材等の中から、その関わり方や立場は違うものの私の中で何かが動き出しているのを感じています。



三井 婦人の十年のまとめにふさわしい行事が多く催され、高齢化社会は即婦人問題だと自分達の課題として真剣に考える人が多くなりましたね。

女の生き方が問われて久しいが、カベに突き当たっても身動きできるように周囲の理解を得ながら、行動する女性になって道を開かなければと思いました。

村松 十年の流れをみると、やはり少しずつですが婦人を取り巻く状況は改善されていると思います。男性が地域社会や家庭に次第に

入って来て、その分女性が外へ出て行く。お互いに視野を広めると話も通じるようになるんじゃないかしら。

杉山 そうね。私は県家庭婦人海外派遣研修の余熱のまま、この編集に関わることができ、婦人問題を学ぶよい機会でした。まだまだ未解決分野が多いながらも、少しずつ男性も女性も意識の変革をしているなと感じます。ただ、自立と協力と思いやりはいつの時代にも要求されるでしょうね。

河原 多様化された女性の生き方の中から、自分に合った生き方を選択することの難しさを改めて感じます。氾濫する情報化社会の中では自分自身を失わずに、賢明に生きていくための手段ではないかしら……。

沢辺 私は婦人問題を他人事と考えていた今までの態度を反省すると共に、これがまだ一部の人たちの間で論ぜられている問題であるように感じています。

任期終了後も関心を持って、回りの友人たちをも巻き込んで、自分たちの問題として考えていこうと思います。

おしらせ

一、昭和61年度静岡県家庭婦人海外派遣団員を募集します。

（四月二十一日～五月二十日）
（申し込み・地元市町村へ）

二、昭和61年度県下30か所での親業訓練講座を開催します。

三、この情報誌の「婦人編集員」（五名）を募集します。

くわしくは、左記婦人青少年課へお問い合わせ下さい。

60年度・編集スタッフ

河原みち代／沢辺 敏江／杉山佳代子
村松由美子／三井 智子
婦人青少年課／曾根 教夫／大川 輝之
鈴木 充代

婦人のための情報誌「ねっとわあく」

第8号

昭和61年3月

編集・発行／静岡県生活環境部婦人青少年課

〒420 静岡市追手町9番6号

☎ (0542) 21-2137番